○ 12 月の人権に関する月間・週間・記念日「人権週間 12/4 ～ 12/10」「人権デー 12/10」「世界エイズデー 12/1)」「障害者週間 12/3~12/9」「北朝鮮人権侵害問題啓発週間（12/10 ～ 12/16）」

十島村教育委員会だより　平成 29 年 11 月号

心わかかにカラ情報

南北１６０㎞
「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒 892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL　099-227-9771

11月・・・第2回村民体育大会

十島村教育長　有村孝一

第2回村民体育大会が、中之島小中学校校庭を会場にして開催されました。昭和６３年に中之島で「第１回村民体育大会」を開催して以来、実に30年ぶりの開催でありました。あの時、高尾のグラウンドで走った時のことを思い出された方もおられたのではないかと思います。教育長室には、その時に撮った写真をポスターにした「海人（うみひと）」が飾ってありますが、それを見ると感慨深いものがあります。

体育大会開催については、いろいろな条件がそろわないと開催できないということがありました。天気はもちろんの事、風、波の様子などのほか、全部の島からの参加者が中之島に集まっていただくためには、平島・小宝島の港の接岸条件も関係しました。

今回は、それらのことがほとんどクリアーされての開催となり大変良かったと思います。ただ、強風のために中之島港でのウエルカムパーティは室内になりましたが、料理の素晴らしさに皆さん大満足でした。

大会当日は、素晴らしい天気で、工夫を凝らした13のプログラムをすべて実施できました。日頃、なかなか会えない方々が、３色のチームに分かれて力いっぱい競技をしてくださいました。時には、大丈夫かなあと心配することもありましたが、無事終えることが出来て本当に良かったと思います。

あっという間の５時間あまりでしたが、久しぶりの対面に、笑いあり、拍手ありの楽しくも懐かしい時間を過ごしていただけたのではないかと思います。その様子に、大会スローガンの「和やかに　笑顔がむすぶ　村おこし」の意味をひしひしと感じることが出来ました。

色別対抗リレーでは、役場チームも加えていただき、若手職員はもちろん村長、副村長、教育長、船長、課長等からなるチームも健闘し大いに盛り上げることが出来ました。

閉会式で「十島の歌」を歌われる皆さんの姿にふれて、村民の心が一つにまとまったのではないかと強く感じました。

そして、各島へ帰る皆さんを乗せた船を見送る時、一人一人の満足した顔に、改めて実施してよかったなと思うことでした。

力いっぱい手を振る姿に合わせて何回も何回も鳴る汽笛に、村の未来を感じました。

村は、子育て施設や多世代交流施設、郵便局、ガソリンスタンドなど、30 年前とは比べようもないくらいに進歩して、人々やＩ・Ｕターンの方々も住みやすい環境が整いつつあります。村民体育大会をひとつの機会として、十島村のますますの発展を願うものです。

祝１　県「心の輪を広げる体験作文」
最優秀賞　宝島中１年　平田一華さん
祝２「鹿児島の教育」県民週間標語
優秀賞　諏訪之瀬島小６年　山中悠輝君

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール　応募作品

ブルーリボンに込めた意味を知って

諏訪之瀬島中学校３年　　山中　雪嘉

ブルーリボンに込められた意味を、あなたは知っているだろうか。私自身、全く知らなかった、あの悲しい出来事だったとは。

私が生まれる３０数年前に、全国の海沿いで北朝鮮に拉致されるという事件が起きた。ニュース等で、幾度か耳にしていたので、ある程度は知っていた。１７人が拉致されて、５人日本に帰国できたと知っている。私は、拉致されたという事実を知っているだけで、拉致された家族の気持ちを理解していると思った。ところが、今回道徳で改めて一から学ぶことによって、自分がまだまだ理解していないことを思い知らされた。

私達は、道徳で、「北朝鮮拉致問題」を学ぶにあたり、ブルーリボンをつけた。このリボンは、拉致された人を救出するための運動という意味が込められている。今回、私達はこのリボンに込められた意味を考えながら授業に臨んだ。

私は、初めて「めぐみ」という物語を見た。そして、改めて拉致というこわさや恐ろしさを感じた。また、めぐみさんの場合、いつも通り学校へ行ってから、帰ってこなくなったので、残された家族は大変不安だったと思った。

もし、私が残された家族だったら、悲しさや不安で、夜も眠れない日々が何度もある気がする。そして、警察や知人など様々な所に問い合わせていると思う。でも私には、めぐみさんの家族やその他の家族のように、２０年も３０年も拉致された人を信じて待つ自信がない。待っている間に、絶望感がいっぱいになり、病気になったり、早く楽になれると死を選んだりしそうだからだ。私は、残された家族の気持ちに寄り添うことができても、なることはできない。でも、私達には、何かできることがあるはずだ。私は、考えているうちに一つだけできることを見つけた。それは、「拉致問題」を正しく理解すること。

現代の社会の中で、北朝鮮といえば核ミサイルで、拉致問題が忘れられつつある。そのような時だからこそ、私達が正しく理解していかなければならないと思う。

今、私にできること。ブルーリボンのことを知らない人は、まだたくさんいるはずだ。だからこそ、私達が一から学んだように、他の人にも一から学んでもらったり、私達が教えてあげたりしたい。そして、いつかブルーリボンをつける人がたくさんいる日本になってほしい。そのためにまず、私が拉致問題を正しく理解できる人になりたい。

シリーズ――新聞に投稿１（平成29年10/26南日本新聞）
「　若い目　」　悪石島小2年　　あり川　みひろ

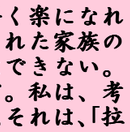
つなづくりのひみつ

この間、十五やのつなひきのつなづくりを、小学校全員で見に行きました。草のたばをどんどんくわえて、みつあみにあんでいきます。おとうさんやおじいちゃんたちが、朝のうちに山でかってきた草が、いっぱいそこにおいてありました。高いところにひっかけて、３人で「はい、はい、はい」と言いながら、力を入れてねじっていました。

まわりの男の人たちも、それをじっと見ながら「もっと、力を入れんと」とはげましていました。よるのつなひきでつかうつなづくりを、こんなにたくさんの人でしているなんて、とびっくりしました。

その近くでは、小なわをつくっていました。できたのを見ると、わなげのわっかにかわいかったでクリスマスのリースみたいにかわいかったです。家にかざるのに、ぴったりだと思いました。

よるのつなひきは、うんどうかいの赤白にわかれてたいけつしました。わたしも、よいしょ、よいしょと言いながら、力いっぱいひっぱりました。くもからお月さまも出てきて、十五やの気分になりました。（十島村）



シリーズ――新聞に投稿２（平成29年10/27南日本新聞）
「　若い目　」　中之島中1年　　川畑　佳輝

気付いた家族のきずな

父の転勤で「中之島に行くよ」と言われた時、僕は中之島がどこにあるのかも知らず不安だったが、家族の事情だからどうすることもできなかった。

鹿児島を離れる日、船の上から母や姉の姿を見て、思わず涙が出てきた。「もう会えないのかなあ」と言ってわけもなく不安になった。

鹿児島の家に帰った。去年までは母と姉の待つ家の仕事を、意識してやるようにした。

５月の連休と夏休み、僕たちは母と姉の待つ家族の負担を減らしてあげたいという精神で生活していたからだ。食後、母が僕に「偉いね、気が利くね」と言ってくれた。あまり立って食器の片付けにかかると、母もうれしかった。

僕は中之島に来て半年。自分の中に芽生えていた家族のきずなを人の支えは家族が離れて暮らすようになって半年。自分の日は自立しているつもりだったが、実は家族が安心は夏休みが終わりフェリーで島に帰る日、「家族生活は「きずな」に気付いた僕は、引っ越してきたあとを人の寂しさを感じなかった。父と弟との３人で暮らせたい。少しでも父を手伝い、母や姉

「先生」と呼ばれた初心忘れない教員　中武美咲希

（平成２９年１０月２４日
南日本新聞「ひろば」掲載

今年４月、諏訪之瀬島小中学校に臨時的任用教員として赴任して約半年が過ぎた。初めてこの諏訪之瀬島に来た日のことを、今でもよく思い出す。

短大を卒業し、夢だった養護教諭として初めての赴任先となり、初めての一人暮らしを、商店もない新しい土地で迎えることになった。赴任前日、フェリーとしまは午後 11 時、新品の家電製品や家具を詰めたコンテナを載せ、鹿児島港を出港した。

港は十島へ赴任する多くの先生や見送りの人、色とりどりの紙テープでにぎわっていた。十島村教育委員会などからの「十島の星となれ」という言葉とともに、自分の名前が書かれた横断幕が掲げられ、胸の奥が熱くなった。

船中での約９時間、新しい生活や教員としての自分のことを思うと、不安と緊張で頭がいっぱいだった。港に着くと、島民や子どもたちが元気な歌声で出迎えてくれた。そして「先生、これからよろしくお願いします」という言葉に、不安や緊張よりも、これから頑張ろう、と前向きな気持ちになれた。

私は「先生」と初めて呼ばれた時の気持ちを、いつまでも忘れずにいたい。そして、子どもたちから信頼される養護教諭でありたい。（十島村）

二つの行事を島活性化の一助に　教員　知念義光

（平成２９年１０月３１日
南日本新聞「ひろば」掲載

先日、口之島小中学校の文化祭と運動会が開かれた。土曜日に文化祭、日曜日に運動会と続けて開くのは、運動会に合わせて来島する方々に、併せて文化祭も楽しんでもらうためである。

卒業生でつくる「たもとゆり会」は、大阪や福岡などから毎年二十数名が参加し、今や運動会の運営に欠かせない存在になっている。小学校の山海留学生２人の保護者も東京と鹿児島市から訪れ、成長したわが子を間近に見る機会となった。

ある母親は、都合で来られなかった祖母に、一生懸命演技する児童の写真や動画をリアルタイムで送信した。その様子を見た祖母は、ぼろぼろ涙を流して喜んだそうである。教員の子どもたちの祖父母も、遠くは沖縄や沖永良部島から駆けつけ、孫の活躍する姿を見守った。競技に参加したほか、懇親会でも親睦を深め、喜んで帰途に就いた。

ダイビングで訪れたツアー客や土木工事業者にも参加してもらい、学校と地域、島外からの参加者が一堂に会した文化祭と運動会は、児童生徒の胸に深く刻まれたことだろう。２日間の行事が、島の活性化や人口増の一助になることを願っている。（十島村）